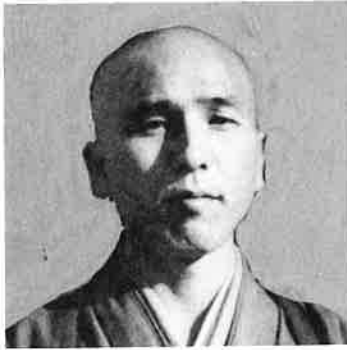


原始佛教における

無我



安井 隆 同

カルカッタ大学パーリ学部
原始仏教哲学専攻博士課程

原始佛教においては、自己をこの上なく愛し^{いと}み尊ぶことを教え説きつつ、無我を説いている。自己を愛し^{いと}み尊ぶことは自我であり、無我とはあい反し矛盾していることを説いているようにも考えられる。

印度のある神が『子供ほど愛しいものはない。』と言ったのに対して、釈尊は『自己ほど愛しいものはない。』と答えた。これは古代ウパニシャッドの哲人ヤージニャヴァルキヤが『ああ、真^{ほんま}に夫を愛するが故に夫が愛しいのではない。自己を愛するが故に夫が愛しいのではないのである。妻を愛するが故に妻が愛しいのではない。自己を愛するが故に妻が愛しいのである。子供を愛するが故に子供が愛しいのではない。自己を愛するが故に子供が愛しいのである。』と説いたのと同じである。ヤージニャヴァルキヤが説いた自己が、いかなる意味を有するかということについては、後世ヴェーダーンタ哲学者の間で盛んに論議されている。原始佛教においては、まず人間は利己的なものであるという、どうにもならない現実の認識からはじまる。

ある時、コーサラ国のパセーナデイ王は、マリツカー妃とともに佳麗なる王城の高殿に上つて、外の様子を眺めていた。その時王は妃に尋ねた。『マリツカーよ、あなたにとって自分よりもっと愛しいものが何かありますか。』妃は『大王さま、私にとっては自分よりもっと愛しいものは何もありません。』と、王は虚しく感じ黙つた。最愛の人の間でさえもこうなのである。人間のありのままの正直な心が素直に出ている。マリツカー妃は、さらに問い返し『大王さま、あなたにとって自分よりもっと愛しいものがありますか。』と、大王は『マリツカーよ、私にとつても自分よりもっと愛しいものは何もありません。』と空しく答えた。そしてパセーナデイ王は、ひとり高殿から下り、祇園精舎の釈尊を尋ね、事の次第をすべて語つた。釈尊はその時、黙つて聞き、聞き終えると『人の思いは、何処にも赴くことができる。されど何処に赴こうとも自己ほど愛しいものを見出すことをできない。そのように他の人にとつても、自己ほど愛しいもの

のではない。自己の愛しさを智るものは、他の人を害してはならない。』と詩句を唱えただけだった。

釈尊が、ルンビニーの花園で母マーヤ夫人の右脇から誕生して、すぐに立ち上がり東西南北に七歩づつ歩み、天と地を指差し『この世の中で自分ただひとりが尊いのだ(天上天下唯我独尊)。』と宣言したと伝えられている。この言葉で釈尊は何を表現しようとしたかについては、いろいろと論じられている。これは釈尊自身が、そののち佛陀となる偉大なる身だからこの私ただひとりが最も尊いのだと言つたのでは決してない。釈尊は、いかなる生きものといえども、世のすべての機縁が寄りて集まり熟して、この宇宙のすべてを生かしている大生命なるものから、受けがたい命、宇宙の大生命とひとつづきに生きて流れている命、別のようにも観えながら大生命と一体となつた命、自分勝手に生まれ生きていてのではない、選ばれて、許されて、生かされて生きている、尊い自己なのであると、深く自覚したのである。だからこそ、この世の中で何より

も誰よりも、自己が最も尊いのだと言ったのである。

釈尊は、深く自己の生命、宇宙の生命の尊厳さ不可思議さを自覚し、自己の誕生にあたり、一切衆生、生きとし生けるものに、釈尊自身と同じように、ひとりひとりが何よりも最も尊い存在であるのだと力強く宣言した言葉と受けとれる。

生きとし生ける一切衆生のひとりひとりが、世のすべての機縁の寄りて集まる、宇宙の大生命の最も尊い中心点であるとも言え、この宇宙なるものは、大生命の中心点ばかりが無数に拡がり、辺境のない球のようなものとも言える。

自己の愛しさ、尊さを徹底的に追求し、真ほんとうに自己の愛しさ尊さを深く自覚し、それを超えた所に、最も愛しく尊い自己と同じように、自己をこの上なく愛しく尊く思っているひとが四方、八方、回りじゅうにいることに気付かせて頂くのである。

マザーテレサ女史が、カルカツタのある集会で「近くに、何日も食事できないで飢えている家族がいると

聞いて、僅かばかりの米を携えて親子を訪問した。母親に米を手渡すと微笑みを浮べ受け取り、早速すぐ裏の家に持って行き、半分づつ分けて来た。マザーテレサは思わず『あなたの家族みんなの一食分にも足りるかどうかの米なのに、どうして半分も裏の家にあげたの。』と尋ねると、その母親は『裏の家族も私達と同じように何日も食べてないのです。』と答えた。」という話をされたことがあった。

ある時私は、歩いての仏蹟巡拝の行脚中に、身分も生活も最下層の貧しき農家に立ち寄った。夕方に、家の主人が素焼きの器に香のようなものを燻くすべ、家の周りを浄め、家と天に向って直向ひたせき祈りをささげ、その後、家の庭に野の鳥たちにと僅かばかりの穀物を播いていた。自分達の食物も覚束おぼつか無いのに。貧しさの底に、香り豊かな一輪の白蓮華を観、無我の実践を見る。釈尊は、自己と同じように、一切衆生を愛しみ尊ぶことを説き実践した。そして我々凡夫に、これが無理なれば、せめても一切衆生を害するようなことだけは

慎めとぎりぎりの所で、血の滲^{にじ}む思いで力説しているのだ。自己に執し自己を徹底的に愛しみ尊ぶことの究極的自覚が、生きとし生ける一切衆生を自己と同じく、

この上なく愛しみ尊ぶことに百八十度転換され、自我が自己も他も分け隔てのない、自他一如の無我の世界へと転じられていくのである。合掌

仏の国印度の大地を歩む

仏陀は私自身の中に生く 菩提への道遠し、されど……

世界のあらゆる文明、文化、政治、宗教、人間のやうに、
つてゐること総ては、時の流れとともに、どこかにかたより、
こたわり、とらわれて在るべからざる方向に流れ、
そして混迷の一途を辿る。その時に、我々は、
そのものの自体の根源に立ち戻ることが最上の道である。
現代の世の中を眺めてみると、世界は益々小さくな

り、それを取り囲む諸問題は益々大きくなる一方である。
縁あり、若くして昭和五十一年より大阪の浄土宗成雲寺住職をさせて頂き、檀信徒に支えられ私なりに一
生懸命、法を学び、法を説かせて戴いた。しかし、一
生懸命になればなるほど、総て矛盾だらけ、仏教も、
世の中も、私自身さえも解らなくなる一方であった。

そんな頃、五十五年二月に、浄土宗大本山百万遍知恩寺法主林靈法猊下と印度仏跡巡拝のご縁を頂戴した。林猊下の力強い現地説法を拝聴し、釈尊入涅槃のクシナガラの開夜に立ち合掌、額づかせて頂いたとき、ああ…、この大地には何かある…、何時の日にか、この宏大な大地を、釈尊とともに語り合せて戴きながら、悠久の流れの中を、ただ歩ませて頂く。釈尊と私の間には、どんな高僧、学者、地位、学問、財宝も挿まないで、直々に釈尊と対座させて頂くのだ、という夢が脳裏を掠めた。

その夢が現実になるまでには、三年の歳月が流れ、総ての縁が熟し、人に委ねられるもの総てを委ね、一衣一鉢、寝袋を携え五十八年一月に印度に旅立たせて頂いた。

すべてをば、ゆだねしのちの、命をも、仏にあずかるく歩まん

印度の大自然、人々、食べもの総ては想像以上に厳しく、一度は、何もかも投げ出して帰国しようと思っ

たこともある。投げ出すものも無い私には、己自身に打ち勝つ以外に道は無かった。

「寒さと暑さと、飢えと渴えと、風と太陽の熱と蛇と、これらすべてのものにうち勝って、犀の角のように、ただ独り歩め。」
(スツパニ

ータ)

そんな時、優しく微笑み語りかけて下さる釈尊…。

仏陀釈尊は、仏聖地にいらつしやるのでも、寺の本堂やそれ以外のところいらつしやるのでも、私と対座していらつしやるのでもなかつた。この私自身の内に、私とともに生きていて下さった。

いにしへの仏陀釈尊我れに生き我れを生かすところ
えまでも

仏陀釈尊が生涯をかけ説法行脚された聖地を、ただ黙して村から村へ行脚。釈尊の声なき声が聞こえ、釈尊の見えざる尊姿が観え、文字無き経が…。今は、ただ何も語れず、書けず…。

ゆっくり行脚をつづけるには、印度の諸状況から大

学に籍を置くことが最も適していた。幸運にもカルカッタ大学にご縁を戴き大学院博士課程で原始仏教哲学の研究をさせて頂くことになり、それと同時に、大学の近くのカルカッタ・インド大菩提会（マハボディンサイテイ）でスリランカ僧と僧院生活をさせて頂くことになった。ただただ大感謝で天を仰ぎ地に伏す。

ある人いわく、「そんなもん印度なんかただ歩いて何になる、何がある」と。私は、何にも無くてもいい、何にもならなくてもいい。何にも無いところこそ、何にもならないところこそ、真に何か、最も尊いものがあるような気がする。求めればもとめるほど、菩提への道は遠くなる、されどこの道を行く。

永遠なるものを求め、永遠に迷える我は凡夫、迷いが迷いで悟りとなり、凡夫が凡夫で仏となる。仏の法（おしえ）に涙し、とぼとぼと、とぼとぼと、ただとぼとぼと、とぼとぼと…釈尊（あなた）にただ一歩近づかんがために、かぎりなく歩む。

合掌

